天理教の可能性
①社会に向き合う、②教理に向き合う

①社会に向き合う

昭和30年代は集団就職の最盛期

この映画は昭和30年代を描いている。
集団就職で東京に出て来た少女の描写から始まる。

東京タワーは昭和32年に工事が始まり、昭和33年12月に完成した。

映画「ALWAYS 三丁目の夕日」
劇場予告版より転載

映画「三丁目の夕日」は、昭和33年頃の東京を舞台にしています。

この時代に創価学会や共産党は入会（党）者を爆発的に増やし、天理教も前二者には遠く及ばないものの入信者が増えています。なぜ入会者が増えたのでしょうか。

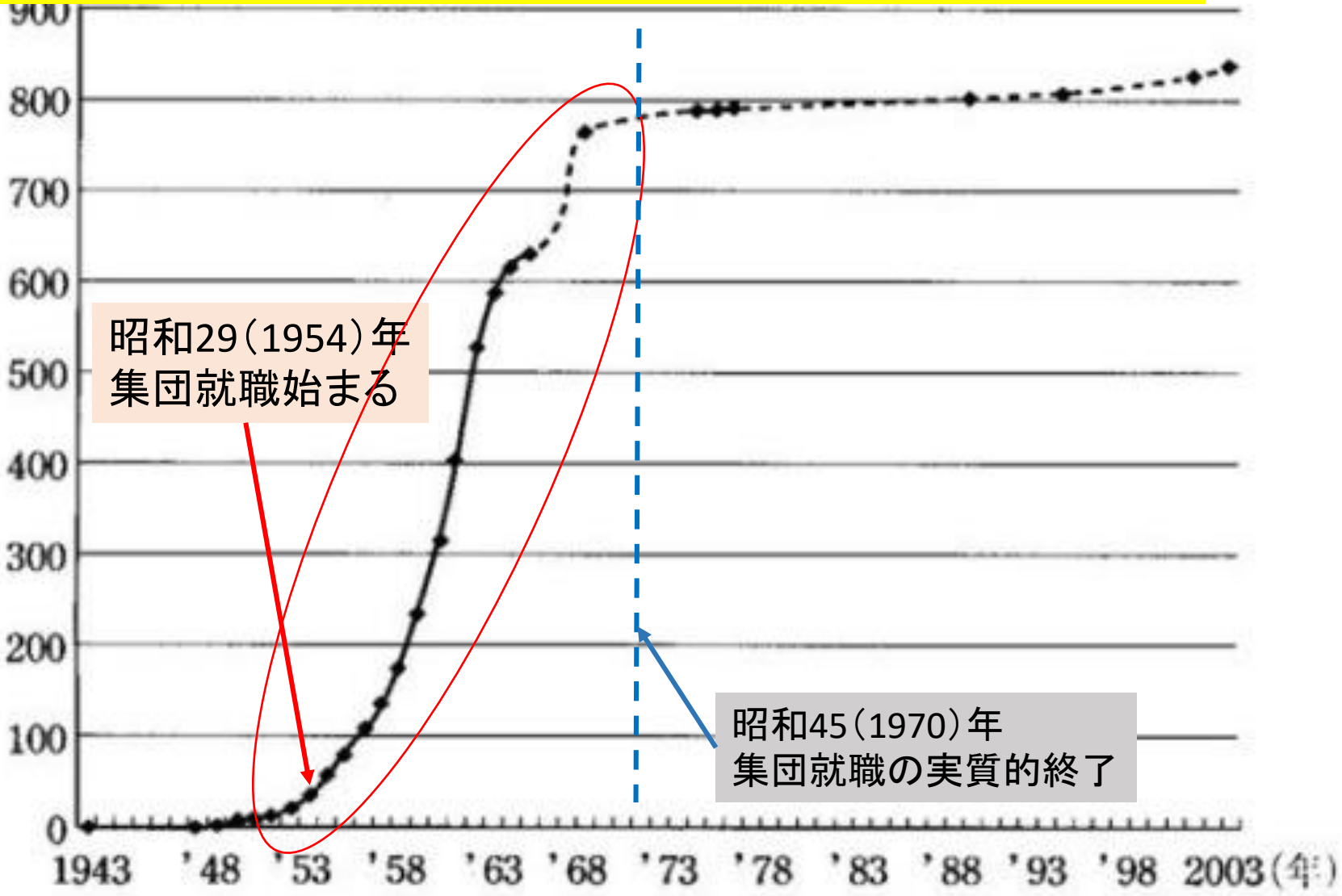
また、この時代から日本の高度経済成長が始まり、安定成長、そして今の低成長の時代へと移っていきます。この変化は何を日本にもたらしたのでしょうか。

この辺の事情を分析しながら、これからの天理教が果たすべき役割を考えてみました。

駅に降り立った少女は就職先の社長の車に乗って仕事場に向かった。「鈴木オート」は大会社だと思っていた少女がそこで見たのは、住宅と一緒の小さな店だったので唖然とした。しかし、そこには将来への夢があった。

創価学会はこの時期に爆発的に伸びた

集団就職がはじまった昭和29年頃から、実質的な終了となる昭和45年頃にかけて創価学会は飛躍的な成長を遂げます。



創価学会会員世帯数の推移 (出典)玉野和志『創価学会の研究』より。

共産党も伸びた

創価学会が伸びる同時期に共産党も党員を増やしています。どちらも集団就職等で都会に出て来た若者が入会（党）していったと思われます。

離職・孤独・犯罪

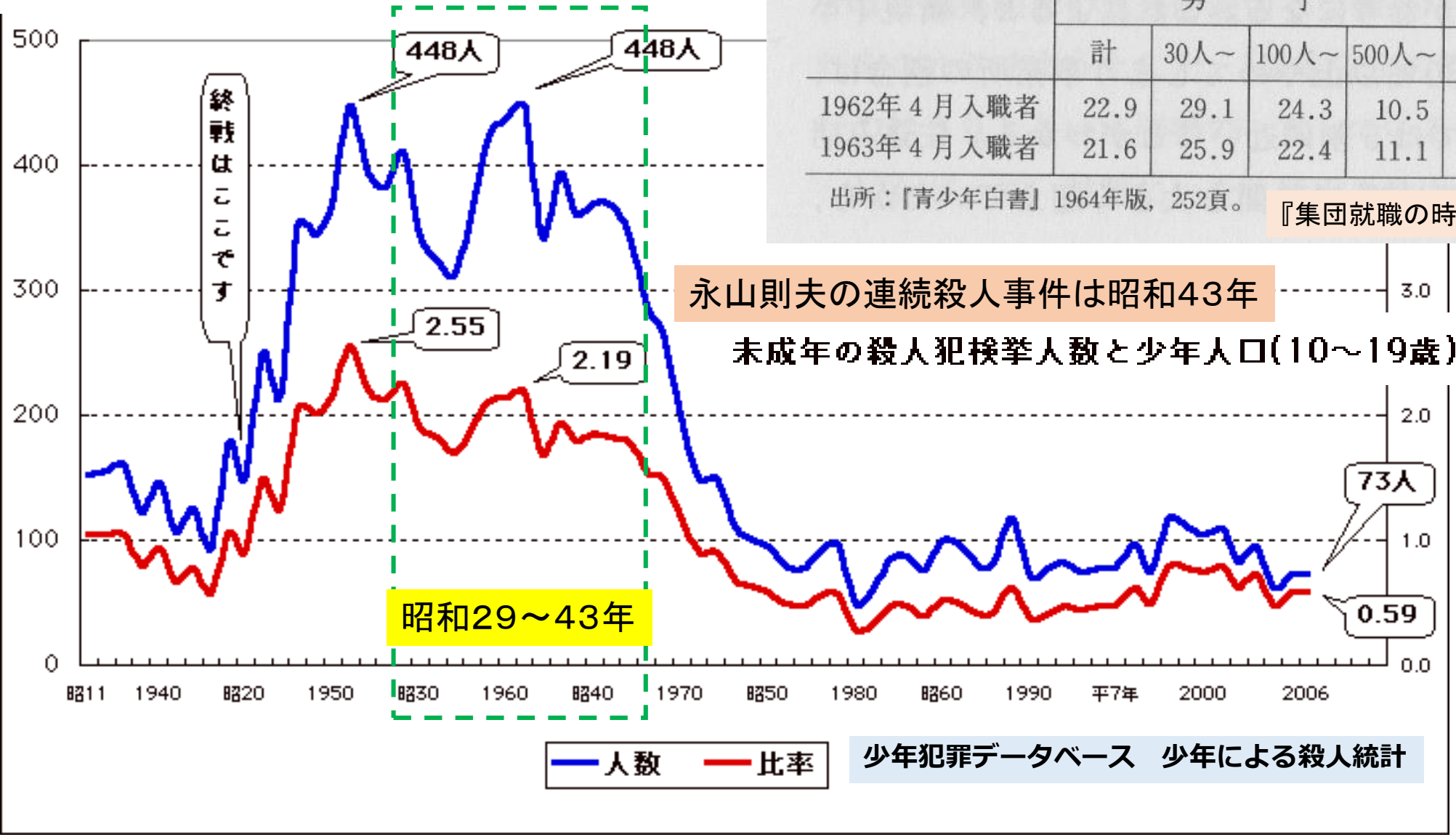
１年以内に4人に一人は離職する

Ⅲ-1-6 表　就職１年以内の離職者率

	男子				女子			
	計	30人～	100人～	500人～	計	30人～	100人～	500人～
1962年４月入職者	22.9	29.1	24.3	10.5	16.8	19.6	18.4	13.3
1963年４月入職者	21.6	25.9	22.4	11.1	18.2	24.8	19.0	14.2

出所：『青少年白書』1964年版，252頁。

『集団就職の時代』P181.加瀬和俊.青木書店.1997



永山則夫の連続殺人事件は昭和43年

未成年の殺人犯検挙人数と少年人口(10～19歳)10万人当りの比率

少年犯罪データベース　少年による殺人統計

集団就職で都会に出て来た若者が、離職した場合、精神的にも、経済的にも困難な状況に陥るだろうことは容易に想像できます。その結果として、未成年者による殺人事件の多さとなって表れているように思えます。

仲間づくり

家族から離れて一人都会に出て来た若者の精神的支えとして、企業主などの援助の下、「若い根っこの会」などの組織が作られていきました。また、「歌声喫茶」と呼ばれる若者が集まって、歌を唄い語り合う場が生まれました。

そういった若者に語り合う場、助け合う場を提供していったのが創価学会であり、共産党であったのです。

「歌声喫茶」昭和30～50年頃に流行

1955年（昭和30年）、東京・新宿に「カチューシャ」、「灯（ともしび）」がオープン。これをきっかけとして東京に歌声喫茶が続々と誕生する。労働運動、学生運動の高まりとともに人々の連帯感を生む歌声喫茶の人気は上昇し、店内は毎日のように人であふれ、最盛期には日本全国で100軒を超える店があったという。また店の看板的存在であるリーダーの中からは、さとう宗幸や上条恒彦のようにプロの歌手としてデビューした者もいた。歌声喫茶はうたごえ運動という政治運動において大きな役割を果たしたが、それだけでなく、集団就職で単身東京に移住してきた青年たちの寂しさを紛らす心のよりどころでもあった。（「ウィキペディア」より）

東京若い根っこの会の劇団〈根っこ〉の公演（『家の光』1960年年10月号）

若い根っこの会

（『集団就職の時代』P199）

この団体は寄宿舎生活をしている工場労働者等も含んでいたとはいえ，「東京の住込み店員と女中の会」（『朝日新聞』1961年10月11日）と紹介されているように，雇用主の家族と一緒の生活を送り，気の休まることのない，最も労働・生活条件に恵まれない年少労働者たちの団体という性格が強かった。

この団体の起点は1953年に発足した東京都世田谷区の「あすなろ会」であったといわれるが，その拡大＝統合のプロセスは，会を主催した加藤日出男の回想によれば，就職先の労働・生活条件が「子供たちの期待を裏切ることがあって，働いてはみたけれど，という泣き言をこぼす場所がなかった。・・・・聞いてくれる『耳』が欲しくて，その耳の役を若い根っこの会が果たしながら同心円的に広がってきた」（エコノミスト編集部1984，163頁）というものであったという。（『集団就職の時代』P205）

昭和30年代の天理教

天理教はこの時期どうしていたのでしょうか。昭和30年代の教会数の伸びは創価学会や共産党などに比べて緩やかです。教会数は昭和40年頃に多くなっています。これは80年祭を間近にひかえてという教内事情もありますが、社会状況に対応した部分もあったと思われます。

年度 Year	年度末の教会数 Number of Churches at the End of the Statistical Year			教会設立 Churches Established during the Year
	総数 Total	大教会 Grand Churches	分教会及び教会（海外） Branch Churches and Overseas Churches	
昭和33年度（1958）	15 252	127	15 125	90
昭和34年度（1959）	15 299	127	15 172	47
昭和35年度（1960）	15 316	127	15 189	17
昭和36年度（1961）	15 340	128	15 212	24
昭和37年度（1962）	15 368	128	15 240	28
昭和38年度（1963）	15 411	130	15 281	41
昭和39年度（1964）	15 461	131	15 330	50
昭和40年度（1965）	15 686	135	15 551	223
昭和41年度（1966）	15 792	140	15 652	105
昭和42年度（1967）	15 866	142	15 724	74
昭和43年度（1968）	15 943	143	15 800	77
昭和44年度（1969）	15 986	144	15 842	43
昭和45年度（1970）	16 046	144	15 902	60

80年祭

昭和29年頃から都会に出て来た若者の支援活動を始めた天理教者が、10年の歳月を経て教会を設立したという具体的な事例もあります。

ただそれは個々の天理教者の活動であり、教団の方針として動いたわけではないのが、創価学会や共産党の伸びに遠く及ばない原因でしょう。

昭和11年末（1936）	12 154 *(102)
昭和21年末（1946）	12 723 *(199)
昭和31年末（1956）	15 073 *(225)
昭和41年末（1966）	15 792 *(242)
昭和51年末（1976）	16 511 *(247)
昭和53年末（1978）	16 578 *(248)

『天理教統計年鑑 昭和53年度版』P100

昭和30年代半ばから、おさづけ拝戴者の数が増加しています。3か月間天理市内に居住しなければならない修養科に比べて、日曜ごとに教会本部へ行けばもらえる「おさづけ」の方が勤労者にとっては参加しやすいということでしょうか。

「おさづけ」拝戴者が増加

	教人登録 Registered Ministers			おさづけの理拝戴者 Followers Granted the *Sazuke*			修養科修了者 Graduates of the Shuyoka		
	計 Total	男 Mas.	女 Fem.	計 Total	男 Mas.	女 Fem.	計 Total	男 Mas.	女 Fem.
昭和33年度 (1958)	3 434	1 393	2 041	26 684	10 247	16 437	11 267	4 504	6 763
昭和34年度 (1959)	3 140	1 219	1 921	24 922	9 497	15 425	10 675	4 104	6 571
昭和35年度 (1960)	3 175	1 190	1 985	23 198	8 158	15 040	10 248	3 731	6 517
昭和36年度 (1961)	2 800	1 035	1 765	25 779	8 945	16 834	10 466	3 625	6 841
昭和37年度 (1962)	3 775	1 414	2 361	26 444	9 394	17 050	10 970	3 786	7 184
昭和38年度 (1963)	4 150	1 488	2 662	27 169	9 615	17 554	11 692	4 014	7 678
昭和39年度 (1964)	4 475	1 534	2 941	28 372	10 265	18 107	12 593	4 207	8 386
昭和40年度 (1965)	4 875	1 687	3 188	31 092	11 365	19 727	13 733	4 858	8 875
昭和41年度 (1966)	4 547	1 710	2 837	37 681	13 570	24 111	12 293	4 423	7 870
昭和42年度 (1967)	5 297	1 852	3 445	32 245	12 053	20 192	12 514	4 599	7 915
昭和43年度 (1968)	4 341	1 588	2 753	39 537	14 632	24 905	12 357	4 337	8 020
昭和44年度 (1969)	5 048	1 852	3 196	51 618	19 323	32 295	13 977	4 884	9 093
昭和45年度 (1970)	4 803	1 794	3 009	28 609	10 630	17 979	11 526	3 988	7 538

増加している

天理教の信者の推移

下の表は天理教の信者、教会数の変化をまとめたものです。明治20年代に爆発的に増えています。この原因は何だったのでしょうか。

明治20年　教祖、身を隠される。　信者数万人。

明治27年　教師数13,000人余　教会数760

明治29年　公称信者数　300万人

（当時の人口は、約4千万人）

明治31年　教師18,150　教会　1,493

倍加運動

大正14年　教徒198,096（よふぼく）

教会数7,478

社会事情、教理に向き合う

昭和11年　教徒288,204

昭和30年　教徒403,071　教会数1万5千余

昭和41年　教祖80年祭　参拝者200万

平成24年　信徒1,199,652

修養科生の数に見る天理教の盛衰

修養科生	終了者数
1948（昭和23）年	11,512
1959（　〃34）年	10,334
1970（　〃45）年	11,526
1975（　〃50）年	15,858
1980（　〃55）年	12,629
1990（平成 2）年	7,520
2000（　〃12）年	4,451
2009（　〃21）年	3,138
2018（　〃30）年	1,572

修養科生は昭和50年をピークに減少している。現在は最盛期の十分の一

明治30年、日本の十人に一人が天理教信者だった！
―天理教が伸びた時期の社会情勢―

明治20～30年
松方デフレによる小作農の大量発生

天理教は教祖が身を隠された明治20年頃から明治29年の内務省秘密訓令が出されるまでの間に飛躍的な拡大をしています。明治29年の信者数は300万とも伝えられ、当時の日本の人口は4000万ほどでしたから、ほぼ10人に一人は天理教の信者だったことになります。

なぜこんなに伸びたのでしょうか。左の文は明治20年前後の日本の状況を歴史学者の色川大吉氏が柳田国男の文章をもとに活写したものです。

このような社会になった原因は「松方デフレ」によるとされています。土地を担保にお金を借りて種や金肥を買っていた農民はデフレによって生産物の価格が下がったことで、その借金の返済に困り、土地を失っていったのです。

「北条町（兵庫県加西郡）にいた明治十八年のことである。それがおそらく日本における飢饉の最後のものだったろう。私は貧民窟のすぐ近くに住んでいたので、自分で目撃した……」

しかし、そのとき柳田は小さすぎた。それから二年して、かれが茨城県北相馬郡布川町に医者をしていた長兄をたずねて移住してからが、むしろ鮮烈であった。柳田はそこでおそろしいものを見る。どの家も、子供といったら男の子と女の子と二人しかいないのである。

ある日、村の地蔵堂にいった。絵馬がかかっていた。その図柄は、産褥の女が、鉢巻をしめて生まれたばかりの赤子を力いっぱいおさえつけているというものであった。障子にその女の影絵が映り、それには角がはえている。そのそばに地蔵さまが立って泣いている。

そのとき十三だった松岡（柳田）国男はこの意味を理解し、水をあびたような気持になった。そして、家に帰って、かれは『救荒要覧』などを読みふけり、大学に入ってからは飢饉の研究にはげんだという。柳田は晩年に告白している。

「その経験が、私を民俗学の研究に導いた一つの動機ともいえるものであって、飢饉を絶滅しなければならないという気持が、私をこの学問にかりたて、かつ農商務省に入らせる動機にもなったのであった」（『故郷七十年』）

読者は気づかれたことであろう。柳田の本にでてくる人民は、民権運動にあらわれる人民とは違う、と。この善良で気弱な人びとは、追いつめられると自分の子を殺し、果ては牢獄においやられ、亡んでゆくことしかできなかったのか、と。

明治時代の民衆生活において、もっとも悲惨な時期だったこの明治十六年から十九年のあいだに、どれだけの囚人が次から次へと新しく送られてきたか。また、どれだけの人間が「活計困難」のために自殺し、または「精神錯乱」におちいって自殺したか。右表の内務省のわずかな統計資料からも想像できよう。この、どの一件をとりあげてみても、柳田が胸を痛めたような人生がそこにあったであろう。

（『日本の歴史21近代国家の出発』P321.色川大吉.中央公論社.1974）

明治20年頃の自殺者と現在のそれは比率的にはほぼ同じ

その時期の自殺者数を見ると、年間5～7千人、当時の人口から現在のそれに直してみると、2～3万人になります。それは、現在の日本の自殺者とほぼ同じです。自殺者数だけから見ると、明治20年前後の日本の状況と現在のそれはほぼ同じということです。

みかぐらうた二下り目に

【七ツ　なんじふをすくひあぐれバ　ハツ　やまひのねをきらふ】

というのがあります。明治20年代の信仰者はこの教えを胸に布教に励み、難渋な人々を救っていったゆえに、爆発的に天理教は伸びました。

当時の熱烈な信仰を現在の教会長たちが持っていれば、信者の数が増えるかどうかは別にして、多くの「難渋」な人々が救われるでしょう。それは多くの自殺者を生み出す国の政策を結果的に批判する形になって明治29年の内務省秘密訓令が出されるのと同じような状況を生じるかもしれませんが、それが教祖の教えなのです。

このことは、昭和30年代の創価学会や共産党が伸びていった時期にもいえるでしょう。すでにこの時期、天理教は教祖の教えを忘れていたのです。

ただ、昭和30年代に人生に迷う若者を「すくひあ」げて教会を作った教会長を私は何人か知っています。それは社会に向き合った結果だと思います。ただ、そこには「よろづいさいのもとなる」教えがあったかどうか疑問もあります。

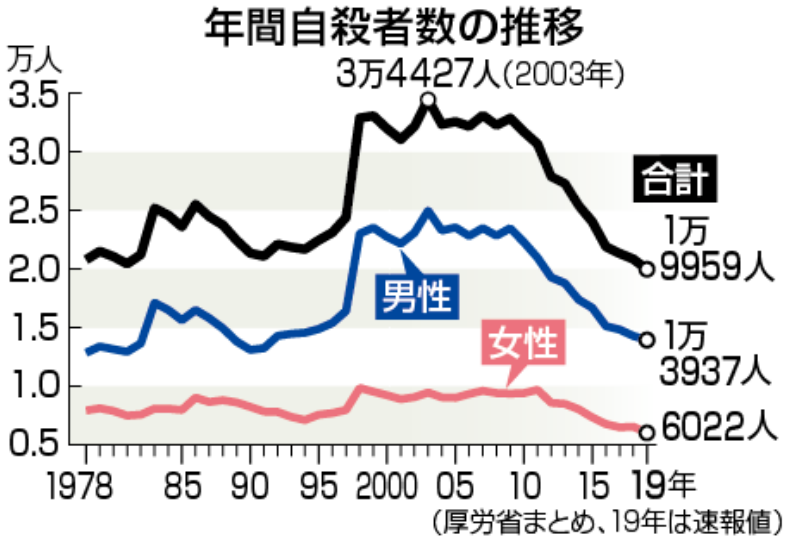
では、「もとなる」教えとは何でしょうか。

松方財政下の自殺者数

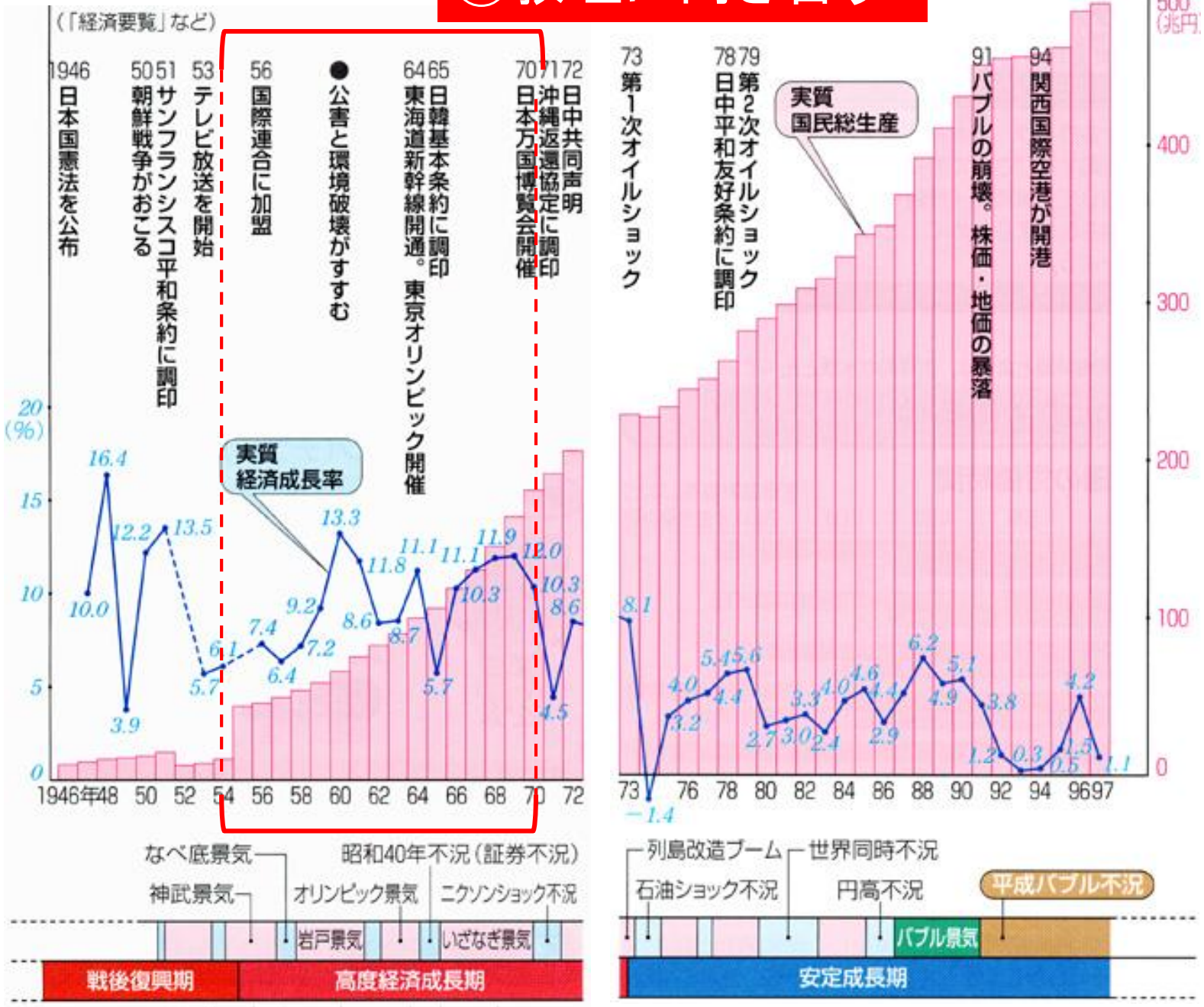
性＼年度（明治）	17	18	19	20
男	3,638	4,676	4,626	3,587
女	1,965	2,606	2,481	2,236
計	5,603	7,282	7,107	5,823

18、19年がピーク。「精神錯乱」によるものがもっとも多く、次に「活計困難」が毎年激増していた。

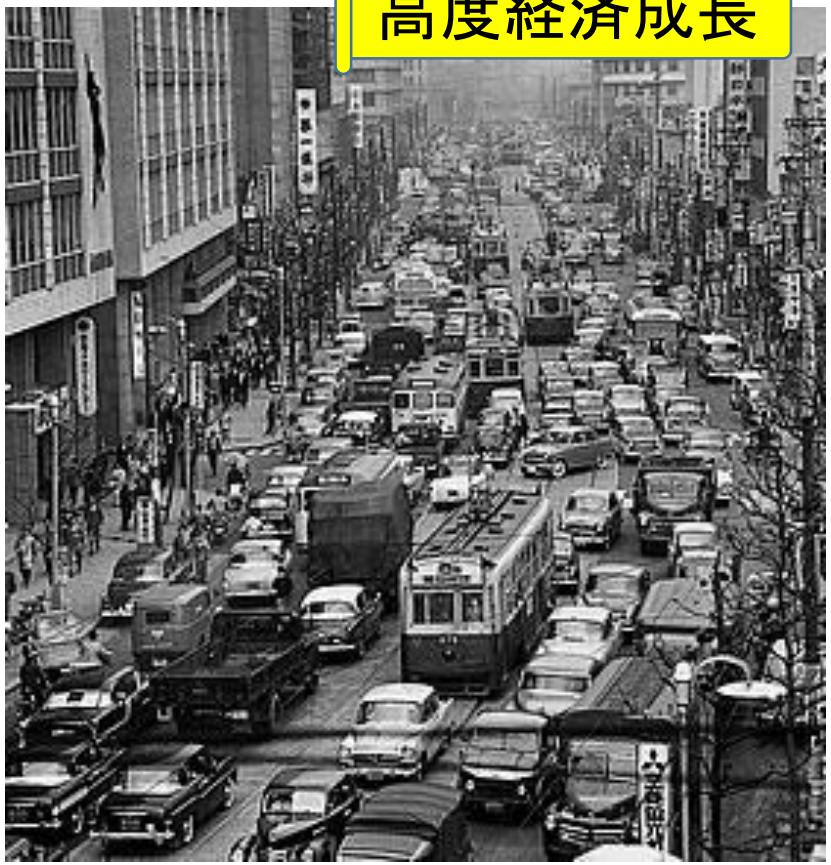
（『日本の歴史21近代国家の出発』P322）



②教理に向き合う



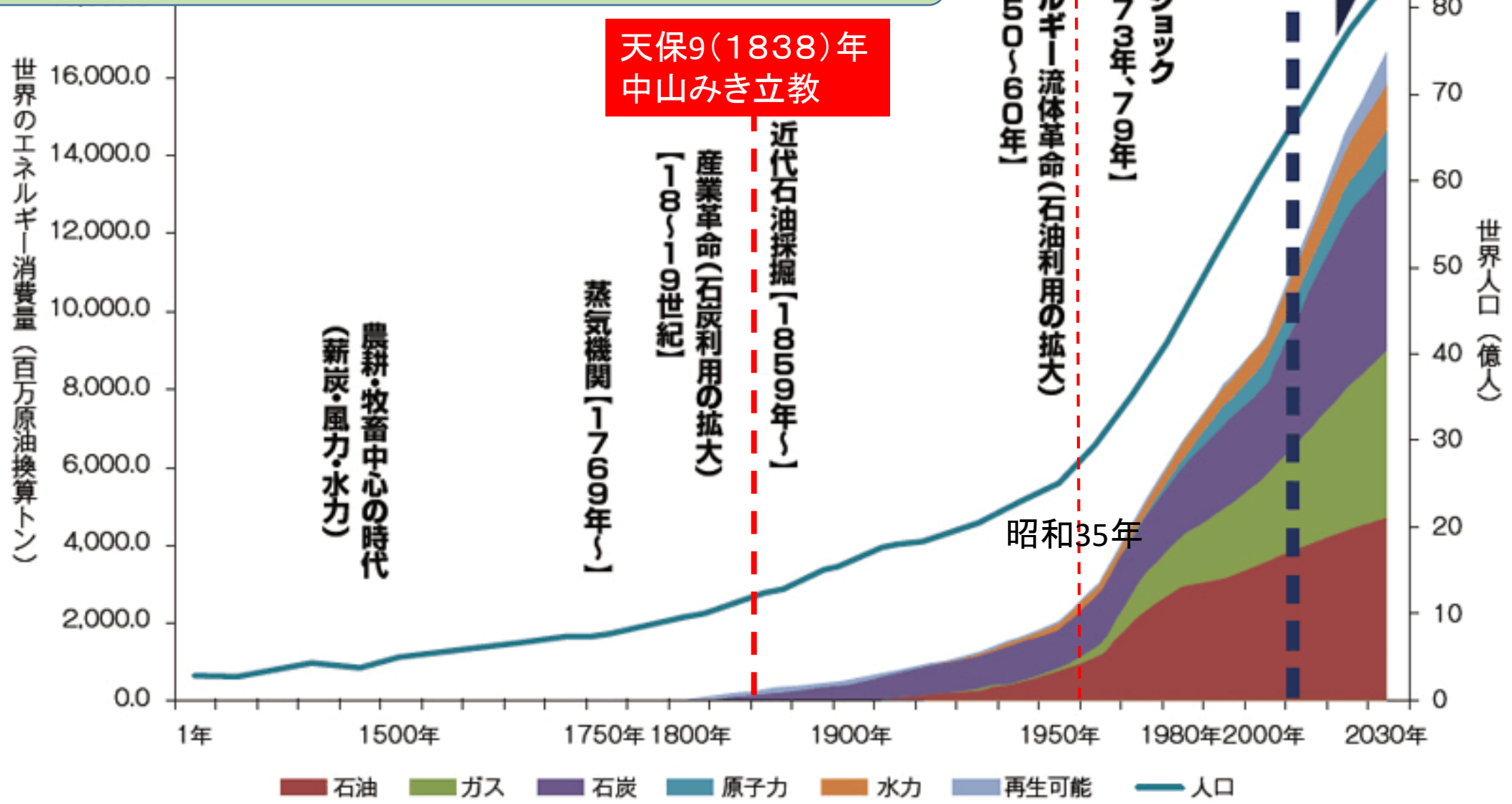
高度経済成長



都電は昭和42～47年に廃止
専用軌道のある一路線のみ現存

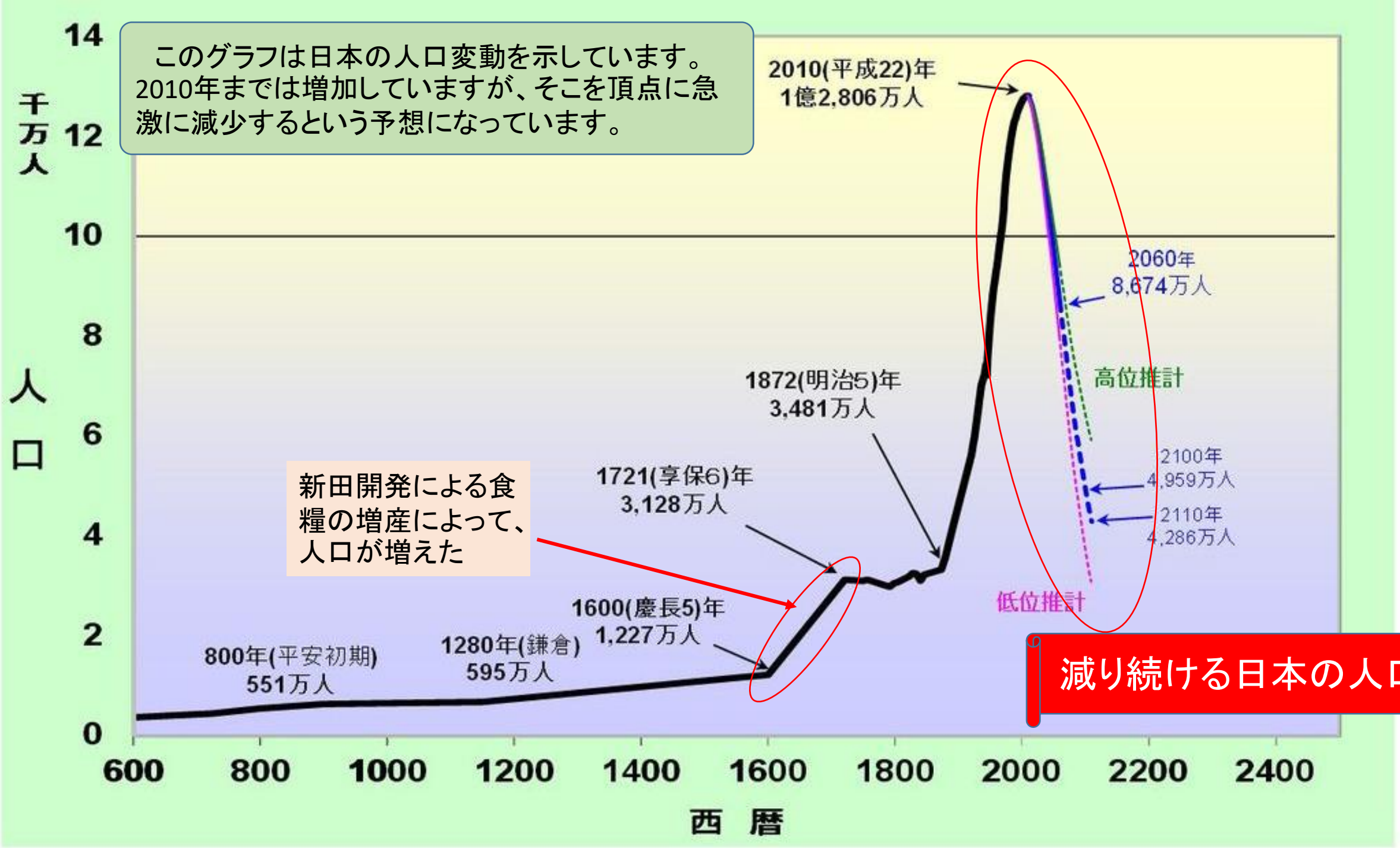
集団就職の時代に日本の経済成長率は年率10%ほどあり、経済はどんどん伸びていきます。

経済成長とともにエネルギーの消費量も飛躍的に拡大していきます。昭和35年頃を境にして、緩かった上昇角度が一段と急になっています。その緩いながらも角度がついていくのは、天保の頃です。また、世界の人口もそれに連れて増大していきます。



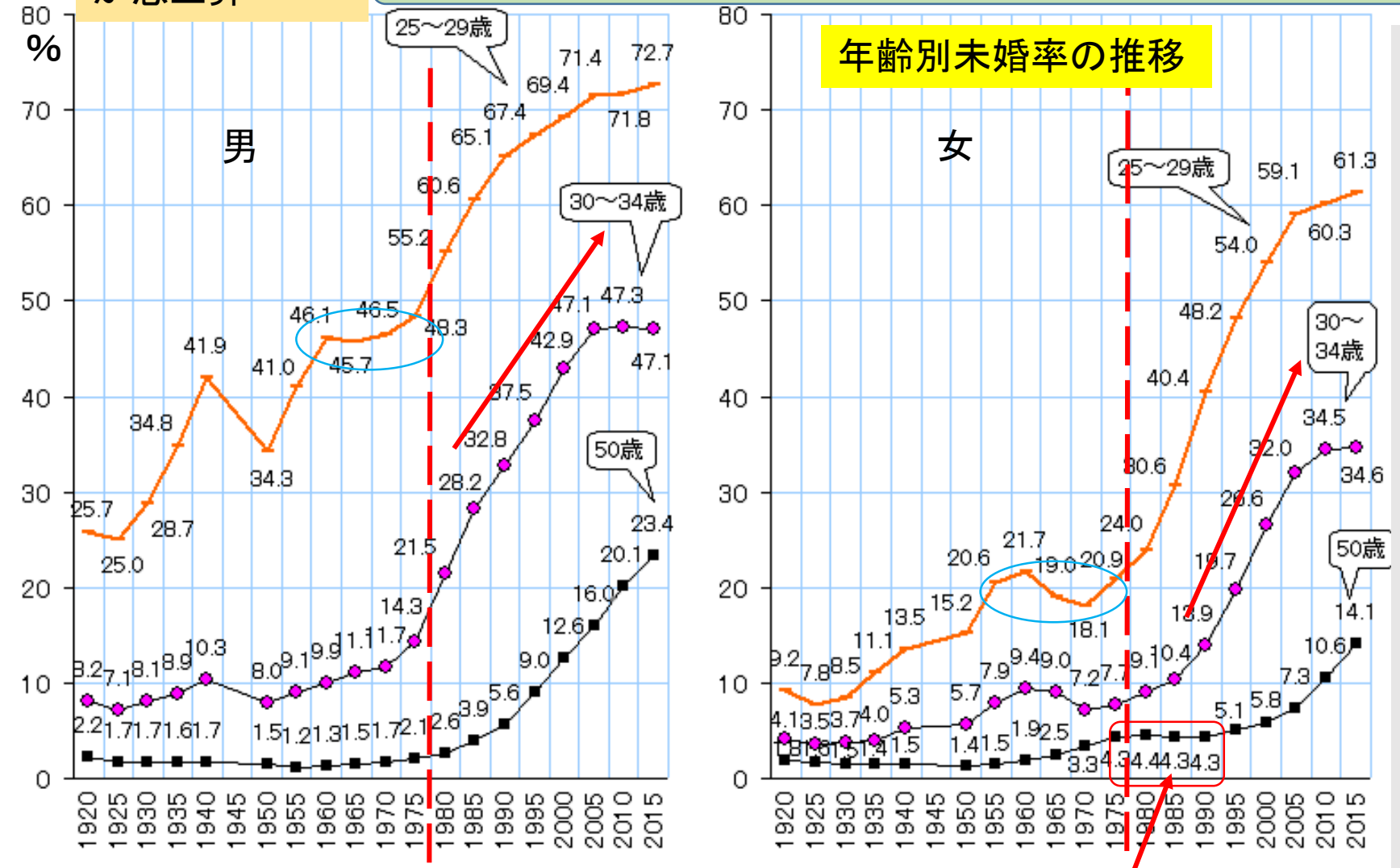
どんどん増えるエネルギー消費量

人口も増える！？


このグラフは日本の人口変動を示しています。2010年までは増加していますが、そこを頂点に急激に減少するという予想になっています。
2010(平成22)年
1億2,806万人
2060年
8,674万人
高位推計
2100年
4,959万人
2110年
4,286万人
低位推計
1872(明治5)年
3,481万人
1721(享保6)年
3,128万人
新田開発による食糧の増産によって、人口が増えた
1600(慶長5)年
1,227万人
1280年(鎌倉)
595万人
800年(平安初期)
551万人
減り続ける日本の人口
千万人
人口
西暦
0
2
4
6
8
10
12
14
600
800
1000
1200
1400
1600
1800
2000
2200
2400

昭和50年を境に結婚しない人が急上昇

下のグラフを見ると、男の未婚率は戦後すぐの時期を除いて上昇傾向にあるカーブが1960（昭和35）年から1975（昭和50）年にかけて踊り場状態になります。ちょうど集団就職で都会に出て来た若者が25～29歳に至る頃です。創価学会や共産党に入った若者はそこで結婚相手を見つけたと想像されます。



（注）配偶関係未詳を除く人口に占める構成比。50歳時の未婚率は「生涯未婚率」と呼ばれる（45～49歳と50～54歳未婚率の平均値）。

（資料）国勢調査（2005年以前「日本の長期統計系列」掲載）

この数値が変わらないのは未婚化ではなく晩婚化であることを示しています。

高度成長期の「出会い」についても見ていきましょう。結婚する前に、まず大量の男女が知り合える場がなければ、皆婚社会にはならないはずです。

当時は未婚の男女が全国的にあふれていました。そして若者たちは、だいたいもれなく組織化されていました。

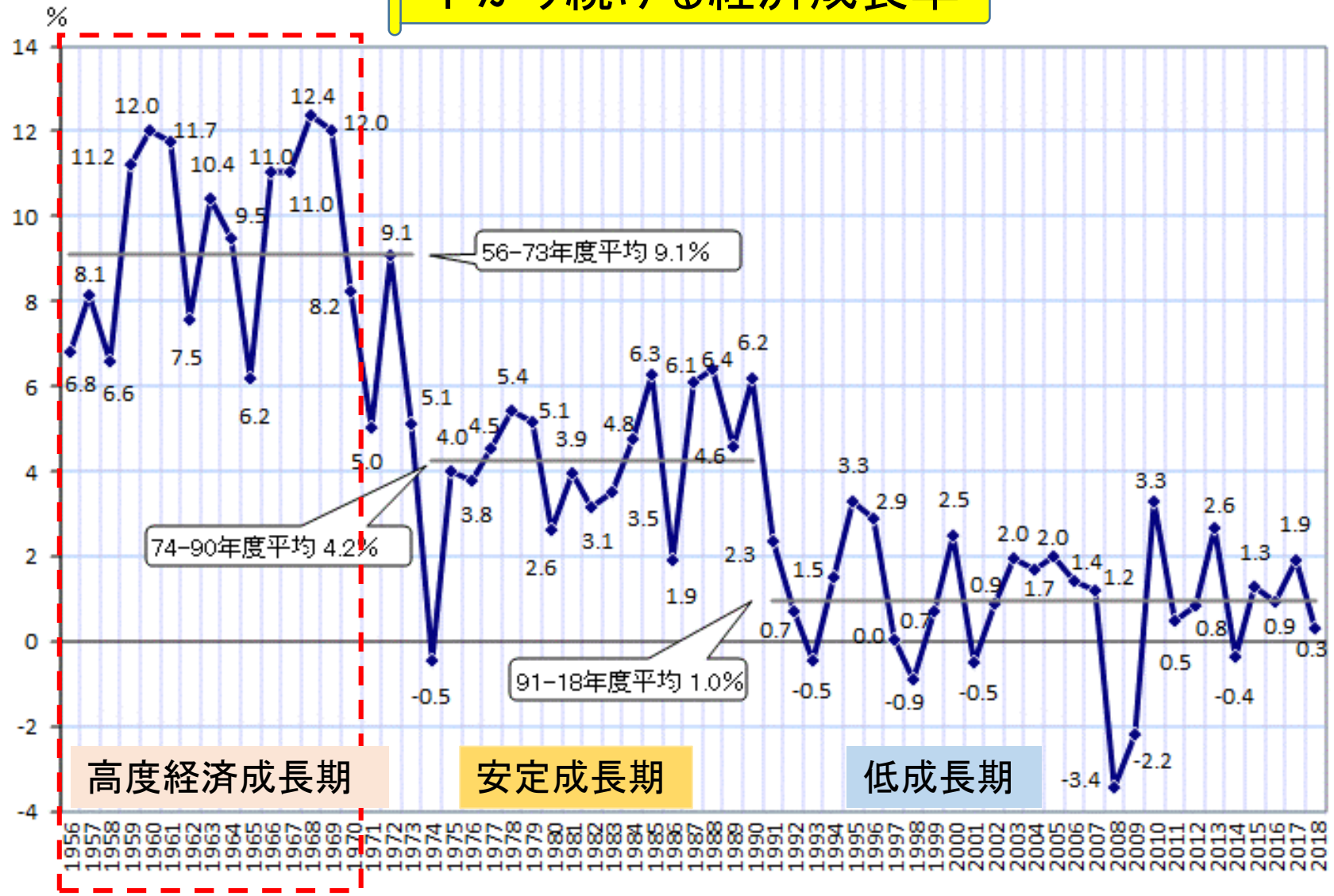
地方に残れば集落の青年団、都会に出れば職場の労働組合、都会の自営業の息子には町会の青年部があり、さらに理髪店なら理髪店の、酒店なら酒店の業界組合の青年部といったぐあいに、若者たちが所属するさまざまな組織があったわけです。

そういうところに未婚の男女が大量に集っていました。そして、組織の中で知り合ってつき合うか、そのネットワークを通じて見合い相手を紹介してもらっていたのです。

また都会に出てきた若者は、男性も女性もみんな正社員として雇われました。だから職場の趣味のサークル（当時は、ほぼ職場にしか「サークル」と呼ばれるものがなかった）で出会うこともできました。（『結婚不要社会』P117.山田昌弘.朝日新書.2019）

経済成長率の推移

下がり続ける経済成長率

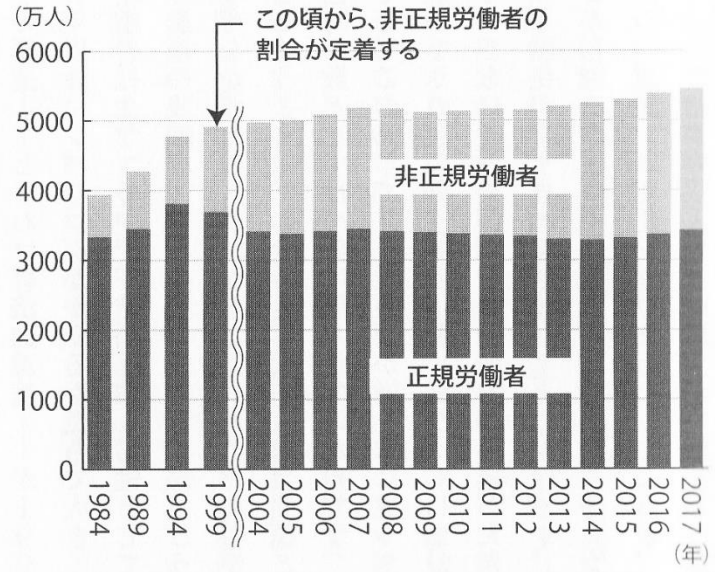


（注）年度ベース。複数年度平均は各年度数値の単純平均。1980年度以前は「平成12年版国民経済計算年報」（63SNAベース）、1981～94年度は年報（平成21年度確報、93SNA）による。それ以降は2008SNAに移行。2019年7-9月期2次速報値 〈2019年12月9日公表〉
（資料）内閣府SNAサイト

ところが、昭和50年を過ぎた頃から未婚率は急上昇していきます。それは高度経済成長期から安定成長期に移っていく時期と一致します。この頃から社会の構造が変化していき、全体的な高学歴化などによって晩婚化していったと思われます。

そして低成長期といわれる時期に入ると非正規雇用が増え、賃金水準は低下していきます。

図表１-３　正規雇用と非正規雇用労働者の推移



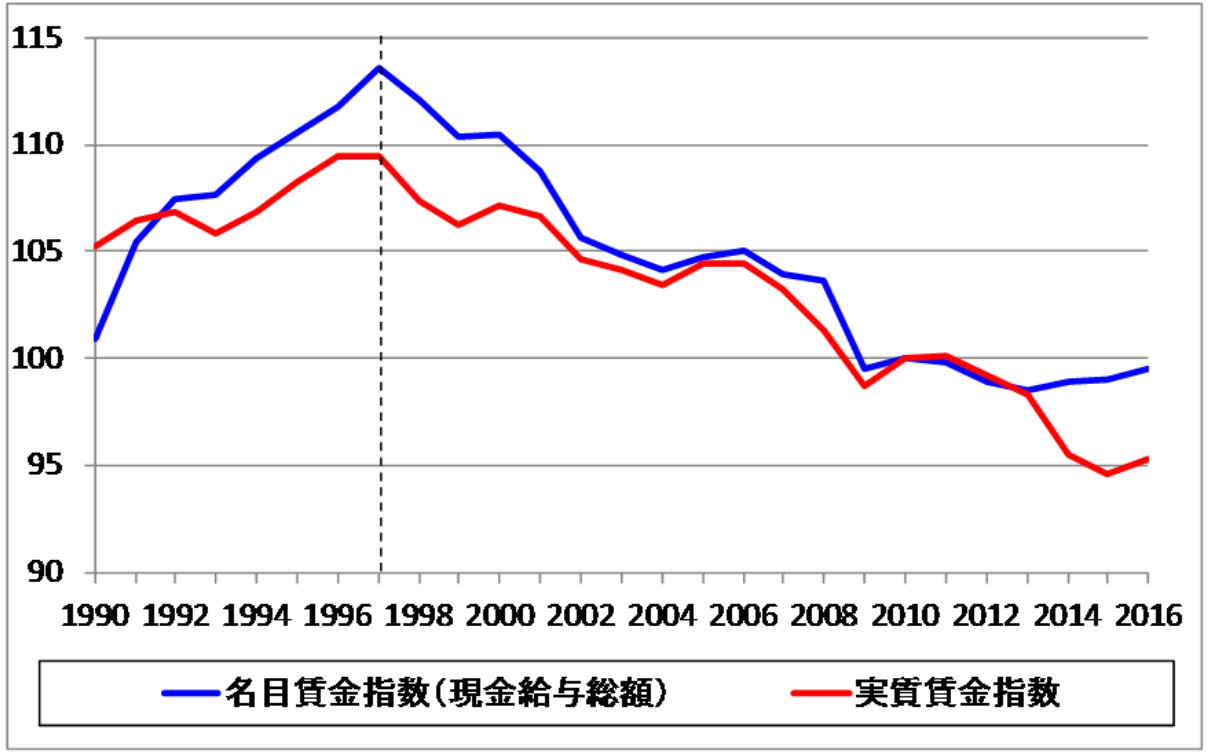
出所：1999年までは総務省「労働力調査（特別調査）」（2月調査）長期時系列表9、2004年以降は総務省「労働力調査（詳細集計）」（年平均）長期時系列表10

（『結婚不要社会』P39）

低収入男性の増加ー未婚率の上昇ー少子化

低成長社会になって賃金水準は低下し始めました。それは非正規雇用労働者の増加が大きな要因になっています。日々の暮らしで精一杯の賃金では嫁に来てくれる女性はいません。女性から見ると、自分の現在の生活水準を結婚することで維持できなくなってしまうからです。結婚する人が少なくなれば、当然子供も少なくなり、人口は減少していきます。日本の今の社会の仕組みが変わらなければ、少子化は避けがたいことになります。ではどうしたらいいのでしょうか。
ここからが教祖中山みきの弟子たる天理教者としての思案のしどころです。

【賃金指数の推移】

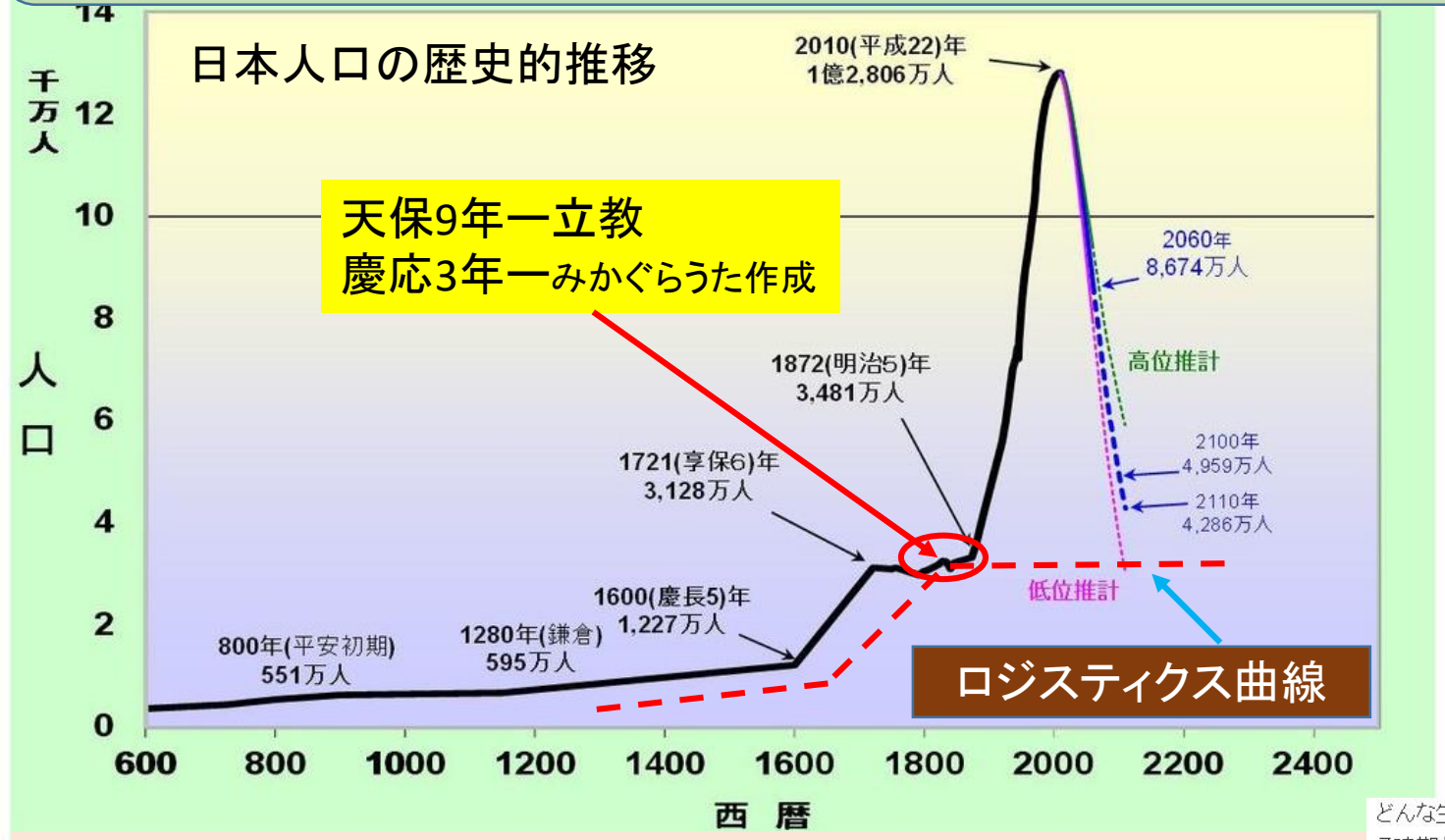


※厚生労働省「毎月勤労統計調査」より島倉原作成。

経済が高度成長から低成長になった1975年以降に晩婚化、すなわち未婚化が始まります。
そのとき結婚をめぐって生まれた現象は、収入の高い男性と結婚できる確率が低下する、という経済条件の変化でした。それでも、収入の低い男性と結婚するのを女性が厭わなければ、未婚化は起こりません。けれどもそうはならず、女性は収入が低い男性とあえて結婚することはしない―。
つまり未婚化は、結婚をめぐる意識は変わらないけれども「経済・社会環境」が変わったがために生じた現象であり、経済の低成長という構造的要因なので将来的にも結婚できない人が増え続ける、というのが私の主張だったのです。（『結婚不要社会』P28.山田昌弘.朝日新書.2019）

動物種の増加の経緯を示すロジスティクス曲線というのがあります。これを人類に当てはめたのが右下の図で、これをさらに日本の歴史的人口推移のグラフに当てはめたのが、下の赤い点線です。低位推計ではちょうど天保年間位の水準に減少することが示されています。ちょうど教祖が立教し、明治維新の直前、「みかぐらうた」を書かれたころです。

明治以降現在までの急上昇と今後の急下降の部分は自然の道理から外れているということでしょうか。



※　日本の人口は、2100年頃には江戸時代末期の数まで減少する。

動物種の増加と安定

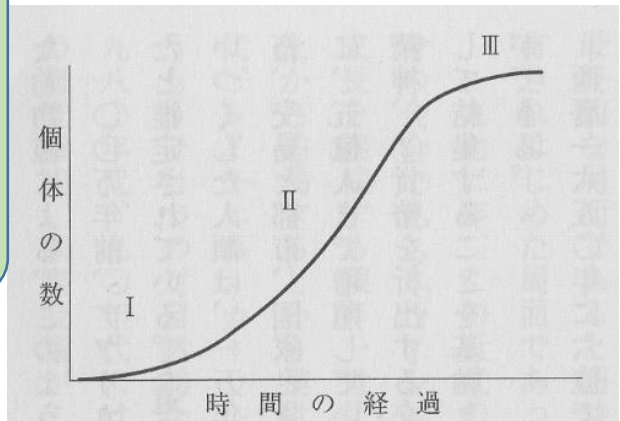
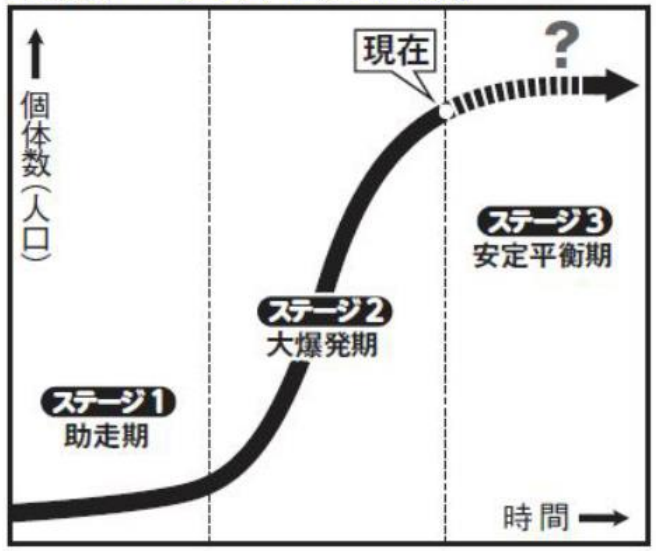


図1a　ロジスティックス曲線

人類の「ロジスティック曲線」



どんな生物も、①緩やかに数が増える時期の後に②急激に増える時期を経て、再び③安定する時期を迎える。しかし、大爆発期の勢いが強すぎると、安定平衡期になる前に滅んでしまう。

「みかぐらうた」の教えを守って暮らす社会が、神の摂理として、本来のあり方ではないか。

「みかぐらうた」には何が書いてあるのか

「みかぐらうた」十二下りのうたは「一ツ　正月こゑのさづけは　やれめづらしい」で始まり、このうたを含めて、「こえ」は4回出てきます。そのうち2回は「こえをおかず（肥を置かず）」とあります。天理教で一般的に伝えられている「こえのさづけ」の通説は、土、灰、糠を3合づつ混ぜ合わせると肥1駄分の効能があるというものです。ただ、これを実行しても肥1駄分の実際の効き目があるなどと思う人はいないでしょう。しかし、この通説は『おふでさき註釈』4号50にも出ているので、これに異を唱える人はいません。「天理教」では、『おふでさき註釈』以外の解釈はタブーになっているからです。そのため『みかぐらうた』でも重要な意味を持つと考えられる「こえのさづけ」については何の考察も行われない状況に陥っています。

ここではタブーを破ってもう少し深い思案を巡らしてみましょう。

「こえのさづけ」のポイントは2回出てくる「こえをおかずにつくりとり」のところにあると考えられます。しかしこれにも「肥」を置かなければ多くの実りなど出来るわけがないという反論が予想されます。

ここで、教祖が生きた時代状況に目を向けてみましょう。江戸時代初期の「肥」は自給肥料と呼ばれる草肥や人糞尿・厩肥などでした。これが中期ころから金肥と呼ばれる干鰯（ほしか）などの購入肥料に変わっていきます。これが「こえのさづけ」のポイントです。

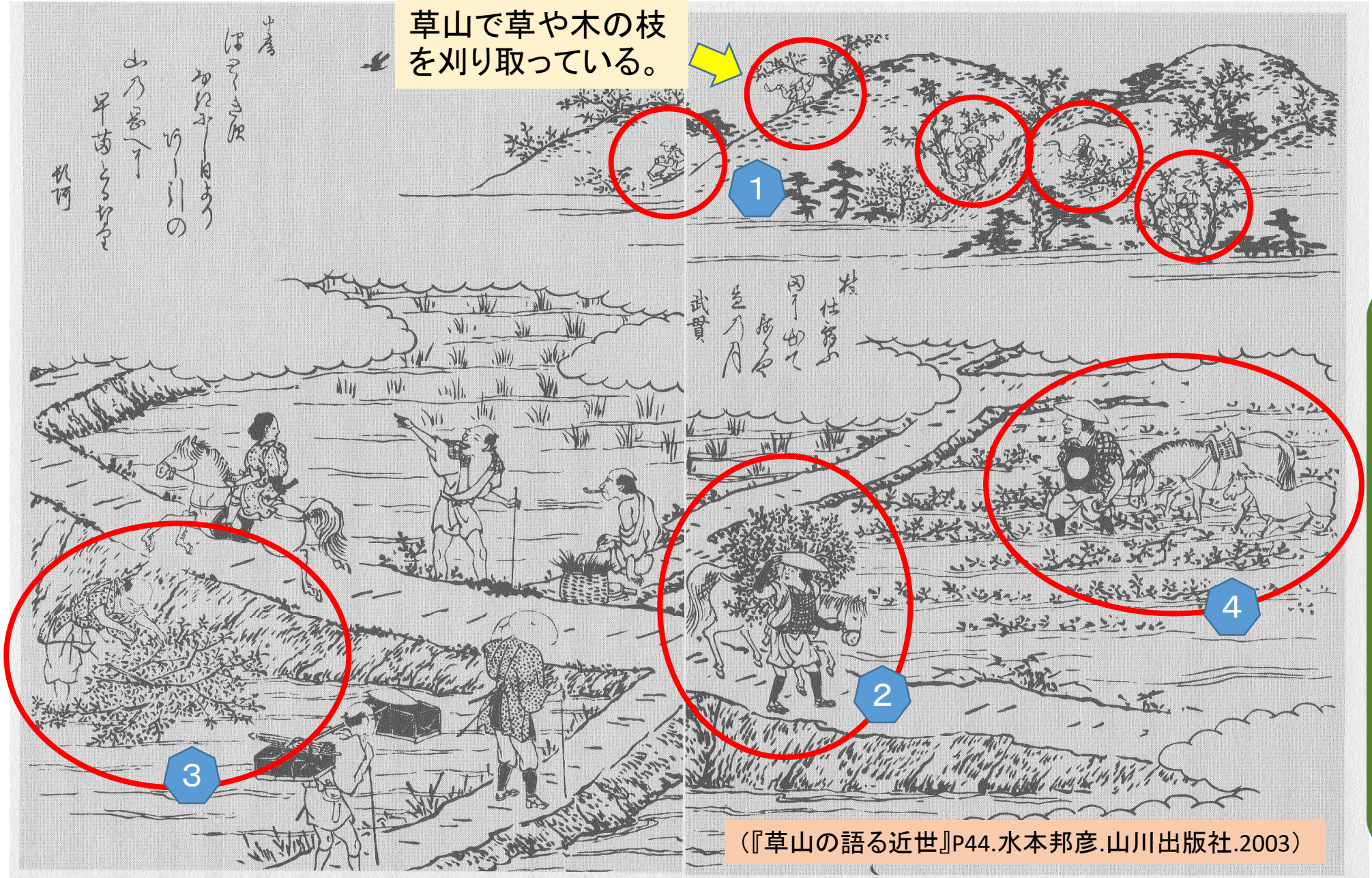
もし、明治以降も自給肥料のままで、金肥やその後の化学肥料を使わなければ、食料は増えず、人口も現在のようには増加しなかったと思われます。

教理に向き合う―「こえのさづけ」って何だ？

一下り目
　一ツ　正月こゑのさづけは　やれめづらしい
七下り目
　十ド　このたびいちれつに　ようこそたねをまきにきた
　　たねをまいたるそのかたハ　こえをおかずにつくりとり
十一下り目
　十ド　ことしハこえおかず　じふぶんものをつくりとり
　　やれたのもしやありがたや

四号
50. このはなしなにの事やとをもうなよ
　こゑーぢよのはなしなるぞや
51. こへやとてなにがきくとハをもうなよ
　心のまことしんぢつがきく

「肥のさづけ」とは、土と灰と糠（ぬか）を一定の割合に混ぜ合わせたものを肥料の代わりとして、このさづけを授けられた者の田畑に施すとき、肥料を施したときと同じ効能がある、というものである。土と灰と糠を、それぞれ３合ずつ混ぜ合わせたものでもって、ふつうの肥の１駄（２俵）分の守護がある、と言われる。（『天理教事典第三版』P343）



（『草山の語る近世』P44.水本邦彦.山川出版社.2003）

●──信濃善光寺道の田園風景　刈りとった木枝を田に敷き込んでいる。空にはほととぎすが飛ぶ（『善光寺道名所図会』）。

江戸時代の田畑用肥の需要を満たしていたのは、草肥だった。

この絵は『善光寺道名所図会』（天保14（1843）年刊）の一枚で、山中で枝を刈り、馬で運び、田に敷いて、馬で踏み込んでいる様子が描かれています。もちろん、肥として人糞尿・厩肥（きゅうひ・うまやごえ）なども用いられていましたが、山野の草木が大きな比重を占めていました。

一枚の絵の中に「①草を刈る、②畑に運ぶ、③畑に入れる、④土に混ぜる」様子が描かれている

江戸時代の農家の経営モデル

金肥モデル

表 4-6　凡例録モデル

	銭(文)	計(文)	割合(%)
支出		97,870	100%
①田年貢(3.5904 石)	23,936.08		
畑年貢(0.5571 石)	3,713.92		
小計		27,650	28.25
②田仕付け入用	11,164		
雇い人夫(18 人×100 文)	1,800		
雇い馬(4 匹)	1,200		
干鰯・皮代	5,600		
肥大豆	1,400		
水肥	1,164		
田麦仕付け入用	1,400		
雇い人夫(11 人)	1,100		
雇い馬(1 匹)	300		
畑仕付け入用	200		
水肥雑肥	200		
小計		12,764	13.04
③家族食費　麦	46,256		
調味料, 衣料, 農具修繕, その他	11,200		
小計		57,456	58.71
収入		89,125.6	
田米(4 反, 6.72 石)	44,800		
田麦(4 反, 6.4 石)	24,739.12		
畑麦(5 畝, 2.4 石)	8,960		
雑事	10,626.48		
大豆(5 畝, 5 斗)	2,800		
稗(3 畝, 7 斗)	1,306.48		
粟(3 畝, 6 斗)	1,680		
小豆(1 畝, 1 斗 2 升)	840		
芋(2 畝, 3 石 2 斗)	4,000		
菜・大根・茄子・大角豆	—		
収入－支出		－8,744.4	

農作業費の3分の2

金肥モデル
寛政6(1794)年に高崎藩(群馬県)で作られた。

草肥モデル

表 4-5　才蔵記モデル

	銀(匁)	計(匁)	割合(%)	銭に換算(文)
支出		3,264.1	100%	217,607
①年貢(21.7 石)	1,085			
付加税(4.34 石)	217			
小計		1,302	39.9	86,800
②田　肥代	250			
麦　肥代	200			
下人給銀(77 匁×5 人分)	385			
牛関係	50			
小計		885	27.1	59,000
③年中入用(10 人, 355 日)	1,077.1	1,077.1	33.0	71,807
内訳・1 日平均 10 人分	3.034			
黍 1 升 6 合(朝夕雑炊の粉)	0.48			
大麦 5 升(白麦 2.5 升昼食)	1.15			
正月など米食	0.122			
菜代	0.1			
塩・味噌	0.23			
薪代	0.3			
茶代	0.06			
油代	0.15			
衣類関係	0.28			
諸道具損料	0.162			
収入		3,290		219,333
米(45 石)	2,250			
麦(40 石)	920			
蕎麦(4 石)	120			
収入－支出		25.9		1,726

下人給銀・牛関係は③から②に移動した. 表 4-6 モデルと比較のため銀 60 匁＝銭 4,000 文で換算した数値を付記した.

農作業費の半分

草肥モデル
元禄(1688～1704)年間に紀伊国(和歌山県)で作られた。

草肥(自給肥料)から金肥(購入肥料)へ

草肥から金肥への転換は収穫の増大という利点ばかりではなく、社会構造の変化という問題をもたらすことになりました。「肥料は農業生産力を向上させるだけではなく、それを入手できるのかどうかが百姓に経済的な格差をもたらしたのです。(『江戸日本の転換点』P215.)」これは現代社会の格差の問題にも通じる視点でしょう。

従来、「遅れた草肥／進んだ金肥」の図式で描かれた金肥の普及に関しては、その大きな原因として、新田開発の進展にともなう草肥取得地の減少という事情があったことも重視したいと思います。**積極的な新田開発の営みが、草肥に依拠したそれまでの農業を破壊する原動力となった**わけです。

上砂留め工事による山利用制限や新田開発にともない**減少する草肥の補填・代替として、金肥は徳川後期の主流**となっていきます。たしかにそれは、速効性などの点において草肥を上回る効果を発揮し、草地を耕地に替えてゆく流れに適合的だったのですが、他方、**それは村社会のなかに階層分化や地域間格差という新しい社会問題を持ち込む**ことになりました。(『徳川社会論の視座』P206.水本邦彦.啓文舎.2013)

「肥を置かずに」の「肥」とは「金肥」のこと
「こえのさづけ」は社会事情を解決するカギである

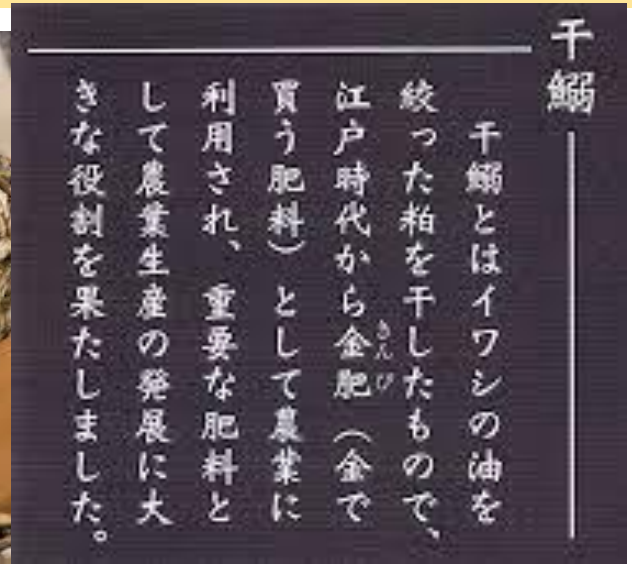
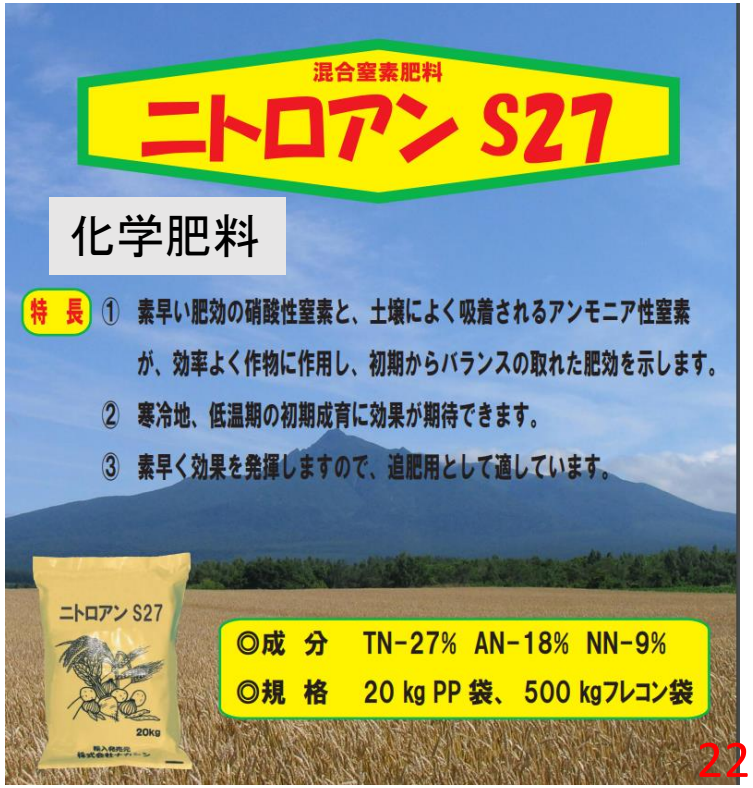
一号21　このよふハりいでせめたるせかいなり
なにかよろづを歌のりでせめ

「こえのさづけ」が説かれた慶応3（1867）年の頃、日本は農業社会でした。その時代には「肥」に対する姿勢が大きな問題、難渋を救うカギになっていました。それが戦後の高度経済成長期の工業社会から、現在は情報社会へと移ってきています。ただ、格差社会への入り口に立っているという点では同じです。今150年前の「こえのさづけ」を当時の社会状況から説き起こして教祖が説かれた意味をそのまま伝えたとしても、あまり意味はないでしょう。

現在における「こえ」とは何かを教祖の思いから思案し社会に伝えていく、また実践していくところに、天理教の可能性があります。

金肥（きんぴ/かねごえ）

購入肥料とも呼ばれ、農家がお金を出して購入する肥料を指す。これに対して、刈敷・草木灰・厩肥など農家による自家生産が可能な肥料を自給肥料と呼ぶ。江戸時代には干鰯や油粕が主であったが、現在は化学肥料になっている。



油粕は、アブラナなどの農作物から油を搾り取った残渣である。主に肥料として、一部は家畜の飼料として使われる。